



高知県立
文学館

高知県立文学館ニユース

藤並の森

Vol. 46



▲関邸に咲き誇るノウゼンカズラ (関 直彦氏撮影)

リレー随筆

「寅彦・花・母」

関 直彦
せき なお ひこ

庭の片隅でフェンスにからみついているノウゼンカズラが、今年も見事なサーモンピンク色の花をたわなに咲かせた。濃緑の葉とのコントラストで、花が空間に一層浮かび上がる。私の母弥生がかつて、その父寅彦の思い出にと植え、大切に育てたものだ。この美しい花の命は短く、咲いたかと思うと、二、三日であっけなくボトリと落ちてしまう。それでも後から後へと、追いかけるように咲き出すので、全体としての開花期間は思いのほか長続きする。短い命なのに、この花は蜜を豊富に貯えているようで、メジロより一回り小さい、名を知らぬ何かの小鳥が蔓につかまり、首を一生懸命伸ばして蜜を吸っている姿は一幅の絵になりそう。もちろんアゲハ蝶や熊ん蜂もやって来る。アリまでも蜜を求めて、はるばる登ってくる。

「好きなもの、母、コーヒー、花、美人。懷して宇宙見物」と挙げているように、祖父は花、ことに赤いバラなど華やかな色の花を愛でていたそう。ノウゼンカズラも寅彦の好きな花のひとつ。しかし、その自然のあでやかさを好む

一方、いざ自分の年頃の娘たちのこととなると別の話で、華やかな洋服を着たり、流行を追うことには大反対。実は和装をさせたかったようだ。地味な色こそ若さを引き立てるのだと、長々と説論して、若い頃の母たちはいたく不満だったという。洋風生活を好む最先端の知識人であっても、我が子のこととなると、かくも保守的になるのはどういうわけか。私には娘がいないので判らない。それでも祖父は亡くなる三年前から夏休みを中軽井沢の星野温泉で家族と過ごすようになって、母はその頃が最も幸せであった、と述懐している。

父親の影響で私の母も花をこよなく愛し、冬以外なら、いつでも庭に花が絶えないように綿密な百花繚乱計画を立てて、色とりどりの草花を植えていた。狭いながらもイギリス風庭園を夢見ているのであった。雑草取りはいつも私の役目であったが、雑草と花の苗との区別に疎い私が、大切な芽を引っっこ抜いて母を嘆かせることもしばしばだった。寅彦の遺児として最後まで生き延びたその母も他界して、早や三年になる。今では妻が母の夢を継いで、更に狭くなった庭と精一杯取り組んでいる。

(寅彦令孫)

展覽會
Exhibition
紹介

「寺田寅彦―
手のぬくもり展」
へのいざない

平成21年
月6日(日)

10月4日(日)
企画展示室
観覧料350円

物理学者・寺田寅彦（一八七八—一九三五）

は、筆まめであつたことが知られており、当館では数多くの自筆資料を所蔵しています。本展では、家族や恩師・夏目漱石をはじめ、交流のあつた人々との書簡に加え、原稿や絵画など「手のぬくもり」の感じられる資料を中心にご紹介し、各々に向けられた寅彦の想いや、その関係性に迫ります。

●肉筆に込められた想い

「何よりも自分に一番近いものを愛することが出来なくては、本當の意味での人間愛は成立しないであらう」(※)

これは寅彦が長男・東一に宛てた手紙の一文。二人の妻に先立たれた寅彦は、ことのほか子どもたちに愛情を注ぎました。それは代表作「団栗」をはじめ、「蓄音機」や「小さな出来事」などの作品にも表れています。

▲ 札幌・富永邸の玄関にて（寅彦五四歳）一九三二（昭和七年）中谷宇吉郎撮影

がやはり如実なのが
手紙です。そこには、
四季折々の描写とと
もに、健康や生活を
気遣う言葉——ユーモ
アもあり、父親として
の「御談義」もあり——
がみられます。他に
も、父や妻、研究分野

●寅彦と漱石

や文学などで関わりのあつた人々へ宛てた書簡類からも、それぞれの寅彦像を窺い知ることができます。

普段の活字とは違つた、少し癖のある肉筆で、より深く寅彦の想いに触れていただければと思います。

寅彦の「夏目漱石先生の追憶」には「人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた」とあります。漱石のもとへ「まるで恋人にでも会いに行くような」心持ちで足繁く通つた寅彦は、俳句の技巧にはじまる文学観のみならず、自身の目で自然の美しさを発見することなどを学び、漱石の存在自体を心の糧としていました。また、「如何なる場合でも、自分の

▼ 寅彦宛 夏目漱石はがき



心にもない事を書かなかつたといわれ
た漱石の姿勢は、寅彦の作品や書簡の
根底を成しています。同じく、漱石に
とつての寅彦が特別な存在であつたこ
とは、音楽会や展覧会へ連れ立つたり、
寅彦を『吾輩は猫である』の水島寒月や
『三四郎』の野々宮宗八のモデルとした
ことに代表されます。また、親しい相手
にしかおくらなかつた水彩絵葉書や
書簡にも、顕著に表れています。

その他、寅彦についての近年の記事などを取り上げます。当館が誇る自筆資料を多数出展しますので、ぜひご来館ください。

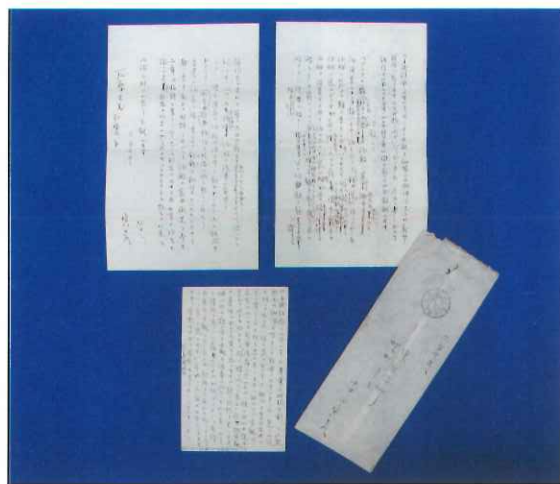
※(岩波書店刊『寺田寅彦全集 文學篇』より)

会 覧 展
紹 介
Exhibition

「寺田寅彦— 手のぬくもり展」へのいざない

平成21年
9月6日(日)

10月4日(日)
企画展示室
観覧料350円



◀石原純宛 寺田寅彦書簡および葉書（一九九六年八月）

寺田寅彦 新資料公開！

◆当館所蔵の寺田寅彦関係資料

文学館開館（一九九七年）を機に、ご遺族から寄贈を受けた千三百点を超える資料は、一部を「寺田寅彦記念室」にて常設し、他を企画展などで公開。その後も寅彦ゆかりの方々からの寄贈や研究用購入資料等を加え、現資料総数は約二千三百点にのぼり、質量ともに豊かな資料群は当館の柱となっています。

◆新たな寅彦資料

今年七月、物理学者・石原純のご遺族から、石原寅彦書簡および葉書が寄贈されました。一九一九年二月、寅彦が作歌十五首の示教を願った書簡には、石原による朱の添削が入っています。一方、石原評への謝辞で始まる葉書では、「俳句を夏目先生に見て貰って居た頃を思ひ出します」と、一九一六年に死去した師・漱石を追憶し、文学論を展開。いずれも岩波書店刊『寺田寅彦全集』に未収録ですが、添削前後の歌のみ、寅彦の「手帳」と歌誌「アララギ」（一九一九年三月）にみられます。ただ、手帳原本は戦災で焼失し、今や全集でしか確認ができないため、その記述を裏付ける貴重な資料だといえます。これら、寅彦の文学観や、敬愛の人々に向けられた想いが胸を打つ資料を、展覧会にて公開します。お見逃しなく。

（学芸課／森 香奈子）

※石原純（一八八一—一九四七）：アインシュタインの相対性理論を日本に紹介した物理学者で、後年は科学ジャーナリストとして新聞・雑誌などへの寄稿をはじめ、数多くの著書を手がけた。また、歌誌「アララギ」創刊にも関与し、歌人としても活躍。東京帝国大学理科大学の先輩にあたる寅彦とは、短歌のやりとりや雑誌「科学」（岩波書店）刊行などで親交を深めた。

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会

日 時：9月20日（日）午後2時～3時半
場 所：高知県立文学館1階ホール
演 題：「寺田寅彦と漱石・家族」
講 師：関 直彦氏（寅彦令孫）
参加料：要当日観覧券 定 員：100名（要電話申込）



■「寅彦の蓄音機とともに」

寅彦愛蔵の蓄音機が奏でる音色を、講師による解説とともに聴きいただけます。

日 時：9月13日（日）午後2時～3時半
場 所：高知県立文学館1階ホール
講 師：細川 光洋氏（高知工業高等専門学校 准教授）
参加料：要当日観覧券 定 員：80名（要電話申込）



▲寅彦愛蔵の蓄音機

■「オリジナル万華鏡を作ろう！」

子どもから大人まで楽しめる工作イベント。万華鏡は、お持ち帰りいただけます。

日 時：9月21日（月・祝）午後2時～4時
場 所：高知県立文学館1階ホール 講 師：橋本 優氏（リサイクル万華鏡協会）
参加料：400円（材料費）および要当日観覧券 定 員：50名（要電話申込）

☆展示解説

9月6日(日)・12日(土)・22日(火・祝)と10月3日(土)・4日(日)
各日午後1時半より(30分程度)、担当学芸員による展示解説を行います。
参加料：要当日観覧券

その他、寅彦ゆかりの地を巡る文学散歩や、朗読の会を催します。
詳細は文学館までお問い合わせください。
(TEL：088-822-0231)

「リサとガスパール&ペネロペ展」 8月31日(月)まで開催中



「今日は絵本を見て、親子でとても楽しい時間を過ごしました。これからも楽しいお話を私たちに届けてください！」

「私は何度見てもあきなくて、三回ほど来ています！そのたびリサとガスパール&ペネロペの可愛さを感じ、癒されます」
「私は十一歳なんです、ゲオルグさんとアンさんのかかれた絵本を手にとつて見てみると、だんだん絵本の中にすいこまれていくようですごくおもしろいです」
「色づかいが明るくてきれいで独特な感じがすごくいいな一つて思います。背景も細かいところまでいいので、見るのが楽しいです。絵本を読んで元気になりました。」



▲会場入り口の様子

開催中の展覧会「リサとガスパール&ペネロペ」展の作者紹介スペースに設けた「ゲオルグさんとアンさんに手紙を書こう！」のコーナーには、多くの応援メッセージが寄せられています。夏休みを迎え、子どもたちから大人まで毎日多くの方が会場にお越しくださり、展示室内は原画を見る嬉しそうな笑顔と明るい活気に包まれています。記念撮影コーナーに置かれたリサとガスパール&ペネロペの大きな人形を見つけて走りよっていく小さなお客様のうしろ姿からは、絵本の世界を全身で楽しんでいる様子が伝わってきます。



▲ゲオルグさん愛用の画材やラフスケッチなども展示しています。

展覧会場では絵本「リサとガスパール」シリーズと「ペネロペ」シリーズの原画を中心に、アトリエの風景写真、色鉛筆のスケッチ、ペネロペのしかけパーツや紙粘土細工などパネルを含めて約百五十点の貴重な資料をまじえ作品の魅力を楽しくご紹介しています。素敵な絵本の世界にぜひお越しください。夏休み期間に開催する展覧会ならではの楽しい関連企画を用意して、みなさまのお越しをお待ちしております。

(学芸課／福富陽子)

関連企画のご案内

エッフェル塔が立っちゃった！

〜リサとガスパールのポップアップカードを作ろう〜
リサとガスパール&ペネロペ展の思い出に、切る・折る・貼るの簡単な作業で楽しい立体カードを作しましょう！

※ハサミ・カッターを使用します。小さいお子様は保護者同伴をお願いします。

開催日：8月16日(日)・8月23日(日)

時間：各回とも午後2時～午後4時

場所：高知県立文学館1階ホール

参加料：参加には当日の観覧券が必要です。

【各回定員 50名様まで】

※カードはお一人様1枚まででお願いいたします。

クイズをしよう！

〜リサとガスパール&ペネロペクイズ〜

展示を見ながらバラエティー溢れるクイズを解きましょう！
正解数に応じて素敵な景品をプレゼントします。

開催日：8月29日(土)・8月30日(日)

時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

場所：高知県立文学館2階 企画展示室内

参加料：参加には当日の観覧券が必要です。定員はありません。

毎週土曜日と8月30日(日)・31日(月)に展覧会担当者による展示解説を行います。

参加には当日の観覧券が必要です。

各回とも午後1時半～(20分程度) 当日、直接会場にお越しください。

大正期の高知巡礼の日々―高群逸枝の「娘巡礼記」― 猪野 睦

四国巡礼ものは多くかかれてきた。再生、苦痛からの脱出、希望など、さまざまの思いを託して、それぞれが順打ち、逆打ちで八十八カ所をめづつた。巡礼の日々、信仰、各寺の姿、時代の移り変わりがかきとめられてきた。そこには明治、大正、昭和、そして現代にいたる時代と人の姿があった。そんななか高群逸枝の「娘巡礼記」があった。のちに女性解放論者となる高群逸枝は二四歳のとき熊本をたち、宇和島から船で宿毛片島にあり、歩いて土佐を通りぬけた。一九一八年七月十四日から九月四日、甲浦につくまでの四三日の行脚である。

その日々を高群逸枝は「熊本日日新聞」に送りつづけた。なにしろ大正八年のことである。主要県道も山道をまわりくねっていて、鉄道もまだなく、むろんバスなどもない時代だった。ワラジと脚絆のいで立ちだった。



▲現在の国分寺

宿毛をたつてからは悪路の峠をこえ、野宿も重ね、行きずりの同行者となったり離れたりの一人旅だった。雨のなか三十九番平田の延光寺をでて山道、谷川を渡り、市野瀬から海沿いに大岐をへて足摺へむかう。あとは伊豆田峠をこえて渡し舟で四万十川を対岸へ、入野松原を通り野宿して窪川岩本寺へたどりつく。

そこから山道を久礼へ下り歩いて翌日、清瀧寺、青龍寺から砂浜を通り種間寺前で夜を明す。長浜雪深寺から漁家の散在する種崎へ舟で渡り五台山竹林寺まで十日あまりかかった。高知市に十日ほど滞在のあと安楽寺、国分寺をへて安芸へむかうが、安芸は台風で橋が落ちており、安田川も濁流滔々とあった。

室戸の金剛頂寺、津寺を下って浜で野宿、「凄風一陣、波濤飛沫きて、髪も袂もしとに濡れぬ。と見るまに大粒の雨降り来る」ともある。そこから一日歩いて甲浦に九月三日につくのが土佐横断四三日の逆打ちだった。

道中行倒れの遍路の墓には杖があり笠があり、草道には墓標もあった。その無情を見ながらの旅だった。今はバス団体も多い。宿泊所、接待所もあり、鈴を鳴らして喜捨にたよった戦前の巡礼姿は、いま古老の記憶にしかない。

香長平野の国分寺から大日寺への田んぼ道は早生刈取後のひろい田園と夏雲をながめ、あとは物部川戸板島の渡しにゆられてであつたらう。いまでもこのコースには案内標識柱が立っている。リュックサックにズツクの白装、杖、笠の遍路姿の過ぎゆく光景が今もある。(詩人)

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

『中平美津子の十三夜』

―高知・紫花人形作家の生涯―

岡野初枝著 編集工房ノア

二〇〇九年六月 一四七頁



中平美津子さんは一九一三(大正二)年高知市生まれの人形作家。女学校に入る年に人形を作り始め、一九五九(昭和三四)年に初めての作品展「紫花人形作品展」を開催、その後一九七九(昭和五四)年までの間に七回の作品展を行い、一九八三(昭和五八)年七十歳で亡くなります。人間全部がお互いに縁があつてほしい。その願いを込めた人形は、好きなすみれの紫にちなんで紫花(ゆかりはな)人形と名づけられました。このわずかなセンチの人形に吹き込まれているのは「可愛い」というだけの画一的なものではなく、あふれる命の情感や魂。作品について中平さんは「今日の感激も明日は消えるかもしれない。その感激を人形に生かしたい。」

受贈報告(平成二年五月〜七月) 敬称略

▼清水源太郎・田中貢太郎及び博浪沙 関係資料
一六一点(井伏鱒二書簡二通、尾崎士郎書簡二十通、田中貢太郎、浜本浩書簡、尾崎士郎(書井伏鱒二(画)による書画軸他) ▼市原麟一郎・市原麟一郎(関係資料千一点(手作り紙芝居、原稿、児童書、民話関係資料一式) ▼井上孝夫・筆のしづく 大町芳衛著 明文館)他 ▼林 亮・椅子のように 林 亮著刊 ▼小松弘愛・大空襲三三〇人詩集 小松弘愛著他 鈴木比佐雄編他 コールサック社 ▼宮川昭男・日本浪漫紀行 宮川昭男著 鯨書房)他 ▼千頭正寿・「詩程」第4号 千頭正寿編 高岡文化クラブ 詩程会他 ▼高知ベンクラフ・高知文芸年鑑 2009年版 高知文芸年鑑編集委員会編 高知ベンクラフ ▼恒石直和・中谷宇吉郎 ゆかりの人 中谷宇吉郎 雪の科学館友の会編刊 ▼横田晴光・大江健三郎 作家自身を語る 大江健三郎著 新潮社)他 ▼宮尾登美子・「生きてゆく力 宮尾登美子著 海竜社」 ▼猪野 睦・「佐野順一郎小説集 佐野順一郎著 土佐出版社」 ▼山本 衛・山本衛エッセイ集『人が人らしくー人権一〇八話』山本衛著 コールサック社 ▼沢田明子・海のうた 沢田明子書

あとに残すつもりはなく、明日は散る花のつもりで作っている」と創作にかける思いを語っています。著者の岡野初枝さんは岡山県生まれ。高知女子大学生時代、紫花人形に出会いその後中平さんと親交を深めていきます。二四年間を高知で過ごした後帰郷。一九九五(平成七)年には「しづれ」と題した人形についての随筆で第四回大原富枝賞に入賞されています。本書は人生の師であり指針だった中平美津子の人間愛の証を拾い集め、込められた願いをたどりながらまとめた一冊であり、著者自身の青春への回帰でもあります。

(学芸課/宮崎圭子)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

文学館トピックス!

高・知・の・文・学・に・関・す・る・情・報・を・お・届・け・し・ま・す!

1

当館で一九九九年に開催した「石川啄木」展の中ではご紹介しましたが、石川啄木の父一禎の終焉の地がこの高知であつた事をご存じない方は多いかと思ひます。一禎を巡つては「高知で亡くなったことをしのぶよすがに」と高知の歌人たちが、一九九二年に終焉の地に近い高知駅前に木製の標柱を建ててしましたが、近年の駅前再開発に伴い撤去されていきました。そこで、歌人たちは、一禎と啄木の歌をセットにした歌碑を建てようと再び立ち上がり、高知市から用地を提供してもらい、現在、建立に向け募金活動を行っています。事務局では、多くの方々にご協力いただきたいと呼びかけています。

2



▲「ポポイ」上演風景
(写真提供: 静岡音楽館 AOI)

倉橋由美子さんの「ポポイ」を原作としたオペラが静岡音楽館 AOI で上演されました。日本を代表する作曲家・間宮芳生さんが脚本と音楽を担当。土佐清水市出身のカウンターテナー・上杉清仁さんが首だけの「ポポイ」役で熱唱しました。格調高く、かつ斬新な演出にアンコールの拍手はいつまでも鳴りやみませんでした。「高知でも是非、上演したい。」と有志が動き始めています。

3

高知市出身のライトノベル作家・有川浩さんの新小説「県庁おもてなし課」が高知新聞に9月から掲載されます。内容としては、本県を丸ごとレジャーランドにと奔走する県庁職員の様子が描かれるそうです。有川さんといえば、当館に次々と受賞された文学賞のトロフィーなどを寄贈くださり、ブログで「高知県立文学館へ行けば、私のトロフィーが見られる」とご紹介くださっています。有川浩さんの小説をきっかけに、新聞を読む学生が増えるかも知れませんね。

(学芸課／津田加須子)

学芸員メモ

小砂丘忠義 資料寄贈について

日々の生活の中にある事実を観察し書くことで子供達の生活を高める「生活綴方」を生み出した高知県大豊町出身の教育者、小砂丘忠義(本名笹岡忠義一八九七―一九三七)の直筆原稿や膨大な書簡や発行誌などを収めた「小砂丘文庫」資料が、都内に住むご遺族から高知県に寄贈されることとなりました。

現在、高知県立文学館と高知県立図書館の職員が八月末をめどに資料の分類・リスト化を進めており、終了後、寄贈の手続きがとられることとなります。

小砂丘忠義は、高知師範学校を卒業。小学校の教師を勤めた後、出版業務に携わり、雑誌「綴方生活」「綴方読本」などを発行。四一歳で生涯を終えるまで、生活綴方の指導と普及に力を尽くした人物です。全国的に熱心な教師からの支持を受けましたが、特に東北地方の教師からは多くの支持を得ました。

今回の資料の中には、絶筆とされる「大芭蕉葉鳴りゆたかに風をのむ」が認められた手帳や日記類、いつも愛用していた眼鏡やバイオリンといった愛蔵品も含まれています。

(学芸課／津田加須子)

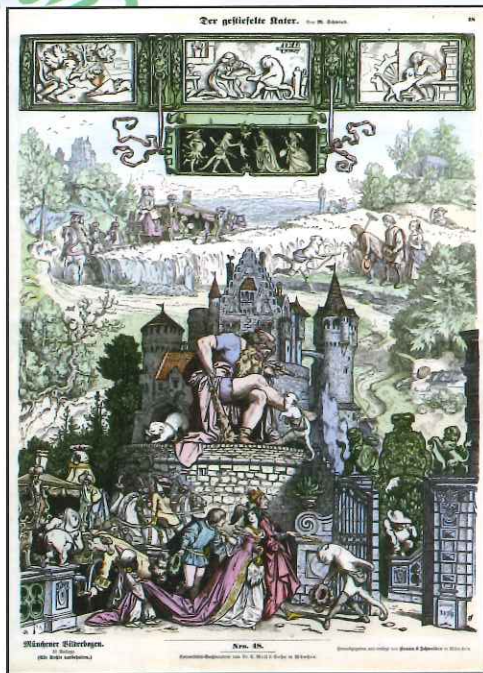
展覧会予告

「一枚絵」に描かれた物語の世界展

一枚絵は、庶民のための絵入り新聞のようなもので、古くは十四〜十五世紀頃に、印刷技術の発展とともにヨーロッパで広まりました。日本の瓦版と似ています。

当初一枚絵は、行商人を通して売られ、無名の画家や印刷工たちが絵を描き、安価な紙に刷られたものでした。テーマとしては、宗教的なものをはじめとし、国内で起こった事件や外国の様子（衣装や景色）などの内容が掲載されました。また、絵を多用していたので、大人だけでなく、子供も楽しみにして読んでいました。

その後、南ドイツのミュンヘンで、新たな一枚絵が発行され始めます。その「ミュンヘン」



▲「長靴をはいた猫」(1850年)

「一枚絵」に描かれた物語の世界展

平成 10月10日(土)
21年 11月22日(日)

場 所: 企画展示室
観覧料: 350円(常設展含)

(学芸課/野々村 昭美)

枚絵はそれまでの一枚絵と異なり、有名な画家が絵を描き、芸術的にレベルの高いものでした。印刷技術の発達とともに大量印刷ができるようになり、より普及するようになります。また、「ミュンヘン一枚絵」は本屋で売られるようになり、上流の市民が買い求めました。室内にインテリアの一部として飾られることもあったようです。なかでも、著名な画家たちによる一枚絵は、後に漫画や絵本の原型になったとも言われています。今回の展覧会は、今年開館十周年を迎えるNPO法人高知こどもの図書館と共催で、特別協力の安田幸子氏所蔵の約百二十点の一枚絵の貴重な原画を一堂に展示いたします。ぜひ、その木版の彫りや色彩の美しさ、細やかで繊細な世界をお楽しみください。

館長室から

「筆は一本也 箸は二本也」 元吉 喜志男

「按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし」この言葉に出会ったのは十代後半の頃だった。文学の道身を立てることの大変さを見事に表現した、明治文壇に鬼才と謳われた斎藤緑雨のこの言葉は、何故か今でも鮮明に残っている。「文学とは…?」「人間生活の上の喜怒哀楽の表現である。」と考えると、敢えてこの困難な道を志すエネルギーの源を理解する糸口にも少しでも近づけるようにも思える。

こうした視点で「高知の文学」の軌跡を辿ると、京の都から土佐へ赴任した紀貫之の心情、筆一本で果敢に世の中に挑んだ自由民権運動文学者達の反骨精神、女性の生き方に正面から向かい合った女流文学者達の深い思い等々…。そこには、土佐の歴史と独特の風土を背景に育まれた、生活に根付いた熱い思いや息づかいが感じられる。

時代は二十一世紀へ、経済や技術の発達により人間の生活が変わることにより、人間生活の喜怒哀楽の価値評価が変化したり、作家の文学への対峙の姿勢や視座、読者の方も自らの思いと重ねながら文学に求めるものの質や内容などが変化するのも当然であろう。

先頃「終の住処」で芥川賞に選ばれた磯崎憲一郎さんは、四十歳を前に三井物産勤務の傍ら小説を執筆している。三十歳近くで小説を書き始めた村上春樹さんは、時代の喧噪から遠く離れて、消えゆく声に耳を澄ます。視点から大勢の読者に受け入れられ、『1Q84』上・下が五月末の発売から増刷を重ね、七月上旬には二百万部に達した現象などに思いを重ねるとき、「時代と文学」とか「これからの文学館」が果たすべき役割とは…といったことを考えさせられている昨今である。

なお「冒頭の緑雨と特に親しかったのが本県出身の馬場孤蝶であったことは大変感慨深く受け止めている。

企画展 案内

リサとガスパール&ペネロペ展

開催中～8月31日(月) (※会期中 休館日なし)

会場：高知県立文学館 2F 企画展示室

観覧料：600円 (常設展含) 午前9時～午後5時 (入館は午後4時半まで)



楽しい関連企画もたくさん予定しています！ 詳細は4ページをご覧ください。



寺田寅彦 一手のぬくもり展

9月6日(日)～10月4日(日) (※会期中 休館日なし・入館は午後4時半まで)

会場：高知県立文学館 2F 企画展示室 観覧料：350円 (常設展含)

寺田寅彦は、筆まめであったことが知られており、実際に、当館では書簡や葉書など数多くの資料を所蔵しています。本展では、家族や恩師・夏目漱石をはじめ、石原純(物理学者・歌人)や宇田道隆(海洋学者・高知県出身)など交流のあった人々への書簡に加え、原稿や絵画など「手のぬくもり」の感じられる自筆資料を中心にご紹介し、各々に向けられた寅彦の想いや、その関係性に迫ります。

「寺田寅彦一手のぬくもり展」の紹介をしています！ 詳細は2・3ページをご覧ください。

第12回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。



◆地区審査(公開)

8月21日(金)午前9時～ 高知県立文学館ホール

8月24日(月)午前10時30分～ 大方あかつき館

8月27日(木)午前10時～ 安芸市民会館

◆県審査(公開)

表彰式・記念講演会があります。

会場：高知県立文学館ホール

日時：11月22日(日) 午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査および表彰式・記念講演会を開催します。

記念講演会開催！

「ねこのダヤン」でおなじみの池田あきこ先生による記念講演会を行います。グッズの販売とサイン会(当日に書籍をご購入の方を対象)もあるよ！ 入場無料ですので、ぜひご来場ください。

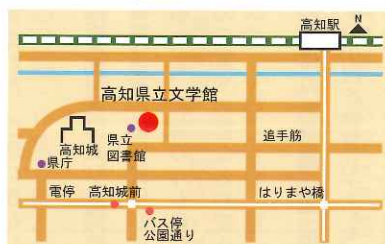
おめでとう！
今年はダヤン
誕生25周年！



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時 (入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
駐車場 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



高 知 県 立
文 学 館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/